

特集

# 激動する中国 ●天安門事件と鄧小平再失脚



鄧小平

中国の首都北京の天安門広場で、清明節明けの四月五日発生した騒乱事件は、全中国を大きく揺るがした。党中央は急きよ反革命事件と断じ、「党内最大の走資派」として追及中の鄧小平副首相の党内外のいっさいの職務を剝奪、華国鋒首相代行を首相、党第一副主席に任命し、事態收拾に当たった。騒ぎは一応収まり、人民日報社説は「偉大な勝利」を謳った。しかし、これで走資派批判・反右派闘争が果たして決着したのだろうか。毛沢東以後に向かって、中国の政治情勢は混迷、流動化を強めていきそうである。そこで天安門事件と鄧小平再失脚の意味を考えてみた。

## 混迷深めるポスト毛への道

中嶋嶺雄

はじめに

激動の相次ぐ中国の党内闘争史において、不死鳥のような存在であった鄧小平氏はいかに再び失脚してしまった。天安門事件という未曾有の政治的動乱の結末としてであった。私はかつて文化大革命で鄧小平氏が激しい批判にさらされ始めた

とき、北京の人民大会堂で、暗に劉少奇氏と鄧小平氏を批判する周恩來演説の間、憮然たる表情で横を向いていた鄧小平氏の姿を目のあたりにし、そのたくましい政治生命力と強靱な個性とを垣間見たことがある。この体験もあずかつて、本誌上でかつて林彪異変以後の中国の政治潮流を論じたとき、脱文革の潮流のなかで鄧小平氏の復活があり得るであろう、と予想したのであった(拙稿「林

彪の死とその謎」、本誌一九七二年八月二十九日号)。

その鄧小平氏は一九七三年四月の復活後、中国内政外交の前面に立って大活躍し、そして、中国社会主義建設のもう一つの選択として、いわゆる「走資派」の道があり得ることを全中国民衆に熟知させたいと、その最後の診断を歴史にゆだねて、今回、華々しくも飄々と失墜していったので

ある。まさに、中国の党内史上に例を見ないドラマであった。

しかし、党中央は、鄧小平解任と華国鋒の首相就任を急ぎ、「毛主席の提案に基づいて」決定したにもかかわらず、そしてこの決定を支持する動きが半ば官製的に全中国で起こっているにもかかわらず、問題は本質的にはなら決着し得ていないような気がする。ここに事態のより重要な側面があるのであり、AFPのルネ・フリボ記者もいうように「過去一週間の北京での出来事は、中国が現在体験している政治危機に最終的な解決を与えたものではなく、その危機の重大さと強烈さを浮き彫りにしたものであった」（北京四月十一日AFP時事）のである。

## 天安門事件の衝撃

中国ではこれまで清明節だといっても、天安門広場に数万、数十万の大衆が集うということは決してなかった。それだけに、さる四月四日の清明節に一〇〇万人を超える大衆が周恩来首相をしり込み集まったと報ぜられたとき、そこに異様な雰囲気を感じしたのは私のみではあるまい。しかも同じ天安門広場の革命英雄記念碑前には、さる一月十五日の周恩来追悼式直後にも献花が陸続と集まり、そして一月十九日夜には解放軍兵士がそれを撤去した事実があった、との情報を私はすでに

入手していた（この点については、さしあたり拙稿「中国の『走資派』批判は何を意味する？」、「価値ある情報」一九七六年四月号参照）。

果たして、この一〇〇万大衆の間には、四月四日の清明節当日から広場の五星紅旗をひきずりおろそうとする不穏な動きがあったといわれ（北京放送四月十二日）、やがて翌五日未明までに献花が官憲の手で撤去されたことを知った数万の大衆



人民英雄記念碑を埋める花輪。故周恩来首相をしるが市民によって供えられたこの花輪が事件の発端となった。WWP

は、あのような「反乱」を起こしたのであった。

周知のように、党中央は、この事件を即刻「反革命事件」と断じ、その首謀者に鄧小平氏を見たて、四月七日、鄧小平氏のすべての公職を剥奪したのであるが、いまや「反革命の敵対的矛盾」とされるに至った鄧小平氏が党と政府の最重要ポストにこの日まで座り続けていたこと自体、きわめて重要な意味を持つであろう。しかも、そのような鄧小平氏の立場を支持する「一握りの階級敵が……清明節に周総理を追悼するという看板を掲げ、事前に謀議し、計画的、組織的に反革命事件を起こし……公然と鄧小平擁護の旗を掲げ、常軌を逸して矛先を偉大な指導者毛主席に向け、毛主席を先頭とする党中央を分裂させ、鄧小平批判・右からの巻き返しへの反撃の大方向をねじ曲げようと企んで、反革命活動を行った」（四月七日新华社電『人民日报』労働兵通信員と同紙記者の共同執筆）のだとしたら、その「一握りの階級敵」が数万の単位で集まり、しかも天安門広場という毛沢東体制下での不可侵の聖域で「反乱」が起こったという意味で、今回の事件は二重の深刻さを持つ。

そのうえ、河南省の鄭州市でも同じ清明節に類似の事件が起き、そこでは死者も出るなど、今回の天安門事件の根は中国全土に潜在していることが暗示されたのである。それだけに党中央、つまり文革派にとって事態の衝撃は大きく、急ぎよ、

強権的に事後措置を講じたのであった。

## 事件の深刻な意味

事件当日、数万の大衆は、単に亡き周恩来首相をたたえ、その哀悼の意のあまり、官憲の規制に對して「反乱」しただけではなかった。彼らは、もっと自覚的であつたように思われる。

ある者は「中国は過ぎし中国にあらず、人民も愚かさ極まれるものにあらず、始皇帝の封建社会は再び返らず、われらはマルクス・レーニン主義を信奉す、マルクス・レーニン主義を去勢する秀才どもよ、引き下がれ……真のマルクス・レーニン主義のため、われら血を流し命捨つるも辞さず、四つの現代化をなしとげしあかつきには、われら酒を供えて祭らん」（北京放送四月七日）との檄をとばし、またある者は「真のマルクス・レーニン主義を骨抜きにしようとして、ハサミを振り回すやからをわれわれは粉砕する」とのスローガンを掲げたという。

こうして、彼らは確かに「毛主席、党中央の指導的同志をあてこすり、攻撃した」（前掲、新華社電）のであり「鄧小平をたたえ、ハンガリー反革命事件の頭目ナジに仕立てようと企んだ」とも、ある文脈のなかではいえない。

このような形の大衆「反乱」は、これまでに前例のないものであり、今回の事件がまさに「走資

事件後の4月8日、天安門広場では鄧小平解任と葉国鋒首相就任を喜ぶ軍民の大規模なデモが繰り広げられた。中国通信



派」批判という路線闘争のただなかで起こったという意味においても、それは毛沢東政治の内部矛盾とその深刻な亀裂状況をそのまま反映した事件であつた。

### 周恩来批判を含蓄

この事件を通じて明らかになったことは、まず

第一に、これまでの「走資派」批判にはやはり周恩来批判が含蓄されていたことである。この点は例えば「走資派」批判の罪状であつた「四つの近代化」論がそのまま周恩来首相の第四期全国人民代表大会大会（一九七五年一月）での政治報告のなかの言葉であることによつても十分に推測可能であり、また、これまでの路線闘争を冷静に分析すれば、十全大会後の「批林批孔」運動、昨夏以来の「水滸伝」批判にも周恩来批判が含まれていたことは推察できたのだが、この点は今回の事件によつて、もはや疑問の余地なき問題となつた。そのことを中国大衆は敏感に感じ取つていたがゆえに「走資派」批判にこれまで消極的であつたのであり、今回の事件の渦中にあつては「走資派」批判の急先鋒であつた清華大学の学生が「なぜ周首相に反対するのか」と群衆から断罪され、暴行されたのでもあつた。

第二は、単に周恩来批判への抵抗のみならず、党の一元化指導のもとで毛沢東主席を唯一絶対の偉大な指導者としていた毛沢東体制下において、周恩来追悼に借りた大衆的な周恩来礼賛が生じたことの持つ意味である。このことは、逆説的には毛沢東政治への批判を意味すると考えないわけにはゆかない。とくに文化大革命以来の毛沢東政治への内在的な批判がこのような形で爆発したのだとしたら、今回の事件は中国内政の将来、すなわち毛沢東以後の中国内政に對して、きわめて大き

な意味を付与するであろう。

そして第三には、周恩来批判の対極として一連の路線闘争の影に見え隠れする文革派のリーダー江青夫人への批判が顕在化したことの持つ意味である。一九三〇年に国民党の手で虐殺されたといわれる楊開慧女史（毛沢東の前々夫人）への敬意が表されたという、痛烈なあてこすりさえ露呈したばかりか、総じて政治を「私物化」し、「走資派」批判そして周恩来批判の張本人はほかならぬ江青女史ではないか、という懷疑が「周總理が江の水に流されるのは許されない」というスローガンや「ハサミを振り回すやからをわれわれは粉碎する」との言葉になって表れ、さながら「魔女狩りの張本人はヒステリックな魔女であった」という中世ヨーロッパの暗黒の断面を描写するような言葉が投げかけられたのであった。ここにも、文革派への挑戦の意味がある。

### 文革派政治への不満

それにしても、今回のような意識的な事件が、中国というような国家体制のもとで、しかも天安門広場を舞台にして、まったく偶発的・自然発生的に起こることなどは絶対にあり得ないように思う。騒乱の諸局面はおそらく自然発生的かつ増幅的にエスカレートしたのであるが、北京市当局は、事件がビークに速するまで傍観していたようにも思われ、そこにある種の作為が感じられない

わけでもない。ましてや、河南省の鄭州でも同様の事件が起きたとなれば、いずれにしても、自然発生的なハブニングだとはみなし得ないであろう。

それにしても、香港の中立右派系紙「明報」社説（四月六日付）もいっているように「政治経験の豊富な北京の大衆がこのような事態を引き起こせば、その結果として各人がどのような立場に追い込まれるかということをよくわきまえているにもかかわらず、あえて断行したことを見逃すわけにはいかない」であろう。

しかも、鄧小平氏はすでに「走資派」批判によって激しく批判されていたにもかかわらず、これほどの大衆的な高揚があったこと自体、やはり文革派の政治への不満の基盤がきわめて大きかったと見るべきではなからうか。

だが、それならば、なぜ「走資派」とその支持を得たと思われる大衆はこのような暴挙に出たのか、という疑問が依然として残る。しかも、この二月上旬以来の「走資派」批判は、この三月中旬に至ってある種の膠着状況を呈し、各地方、末端諸単位では逆に「走資派」の壁の厚さが実感され、文革派としても鄧小平失脚への契機がつかみ得なかったように思われていただけに、やはり今回の事件には、きわめて屈折した複雑な経緯が、広範な大衆の素朴な心情の背後に存在していたという保証はないであろう。

### 明らかになつた路線闘争の断面

右のような巨大な疑問点を残す今回の事件ではあったが、同時に、一連の事態によって、これまで不透明であった路線闘争の諸断面がかなり明白になった。

まず、最近の「走資派」批判のなかで強調される論点として「右からの巻き返しは昨年の夏に起こった」（二月六日付「人民日報」評論員論文「プロレタリア文化大革命の継続と深化」および『学習と批判』第二号の延風署名論文「唯生産力論のいわゆる新しい論点を評す」など）とされている点である。「走資派」批判における鄧小平氏の罪状もその大部分が昨夏以降のものであり、それまでは鄧小平自身、七四年四月には国連資源特別総会への中国代表としての出席、昨七五年五月にはジスカールデスタン仏大統領との会談のための訪仏など、安定的な活躍を続けていたといえよう。

それでは、昨年の夏にどんな事態があったのであろうか。この点で想い起こされる主要な事実としては、まず第一に、かつて文化大革命の初期に激しく批判されて失脚した旧幹部、羅瑞卿（元人民解放軍総参謀長）らの一連の軍幹部が復活したことであった（七月三十一日）。羅瑞卿の復活は



大いにいらだたせたように思われ、彼らは毛主席の余生という時間との闘いにおける迫られた緊張感のなかで、一挙に鄧小平打倒へと向かっていったような気がする。

こうした経緯のうちに、すでに一月十九日には最初の花輪撤去事件があり、一月下旬に開かれたと思われる党中央の重要会議では鄧小平氏の首相昇格への抵抗が功を奏し、結果的に華国鋒首相代行が実現した。そして二月六日の「人民日報」評論員論文(前掲)以来、「走資派」批判は本格的に開幕したのである。

だが「走資派」批判は、清華大学や北京大学の壁新聞、「人民日報」や「紅旗」それに「光明日報」や「学習と批判」などのマスメディア、工業分野では大慶油田、農業分野では大寨生産大隊、軍では瀋陽部隊など、主に文革派の拠点ないしはモデル地区で高揚したにすぎず、全国の地方と末端には容易に浸透してゆかなかつた。このことは一方で「走資派」の潜在的基盤の強さを物語っており、「階級闘争」よりも「安定團結」を求め、「貧困のユートピア」よりも「豊かな社会主義」を求める大衆の心理もあざかつて「走資派」批判が結局は周恩来批判を含蓄することへの大衆の戸惑いととも「走資派」批判は一時停滞に陥り、文革派は焦慮せざるを得なかつた。鄧小平はあれほどの激しい批判にもかかわらず、依然として公職にとどまっていたのである。

## 鄧小平失脚と華国鋒昇任

天安門事件は、ほぼ右のような経過のうちに発生したのでいえよう。

天安門事件の党中央に与えた衝撃がいかに大きかったかは、翌々四月七日、急きよ、中央政治局決議として鄧小平氏の公職解任と華国鋒氏の首相昇任を決めたことによつてもうかがわれる。この決定はもつぱら「毛主席の提案に基づき」行われたものであつて、党規約や現行憲法上の政治的措置も経ていない緊急措置であるだけに、手続き的にも問題が残るものであつた。政治局会議の満場一致の決定だと公表されたが、果たしてどの程度の参加者が得られたのかも定かではなく、せいぜい一〇人程度の参加者ではなかつたかとも推測されている。

しかも鄧小平問題は「敵対的矛盾」だとされながら、鄧小平氏の党籍が残されたのは、鄧小平氏の党籍剥奪まで一挙に実現することが困難であつたのではないかと思われる。そして、文革派はこの党中央の決定を契機に「走資派」批判の対象を鄧小平一人に限定し、「走資派」批判の底流に潜んでいた周恩来批判を当面引つ込めざるを得ないという戦略的後退を余儀なくされたように思われる。

今日の文革派に、大衆の反撃を抑えてまで周恩

来批判を展開し得る余地はないであろうし、もしもそのような挙に出るならば、第二、第三の天安門事件が全国各地で発生しかねないという今回の教訓を当面は甘受せざるを得なくなつたのではなからうか。

では、「走資派」とは果たして鄧小平一人であつたのだろうか。まさに「人民日報」がこれまでしばしば指摘していたように「彼らの活動には理論があり、綱領があり、組織があつた」はずである。もしも路線闘争を徹底するのなら、「走資派」の理論と綱領と組織とを全面的に打倒しなければならぬはずである。ところが、一方では、鄧小平の解任と同時に李先念、譚震林らの実務派旧幹部が再出現し、地方の旧幹部もほぼ健在である。ここには、急きよ事態を処断した党中央政治局会議の内部にすでに妥協があつたことを物語っているようにも思われ、だとすれば、今回の決定で鄧小平氏の党籍が残されたことは、やがて毛沢東以後の時代に大きな意味を持つことになるかもしれない。

いずれにせよ、現代の中国にとつて宿命的な毛沢東後継者の地位を華国鋒氏が固めてゆくためには、華国鋒自身の政治的成長と事態のさらなる流動が必要であるように思われる。当面、華国鋒首相は、毛沢東以後へ向けての一種の「危機管理内閣」を担つてゆかねばなるまい。いずれにせよ今回の一連の事態は、毛沢東以後の中国にこそ、路

線闘争の正念場が出現するのではないかという予感を広く内外に与えてしまったという点からしても、きわめて重大なハブニングであったといえよう。

中国民衆の多くは、その一部に現れている官製的な祝賀行為の外にあって、今回の事件の持つ深

刻な意味をいま静かに掘り下げて考えているのかもしれない。

(東外大助教 樋口)

現地報告

## 天安門事件、全中国を揺るがす

北京特派員 人見憲太郎

### 民衆、献花撤去を怒る

四月五日早朝から市民の足は、ひっきりなしに天安門広場へと向かっていった。前日の四日は、旧曆三月五日の清明節。中国では古来、この日は各家で祖先の墓参りをする日だが、解放後は中国革命に尽くした英雄烈士の墓や記念碑に詣でる風習となっている。今年には周恩来首相が亡くなってから初めての清明節とあって、天安門広場に周首相が建国前夜の一九四九年九月三十日、揮毫し、建立した「人民英雄記念碑」に、同首相を偲んで三月末から献花する市民の列が五日まで延べ数十万人に及んだ。

五日、記者も現場に居合わせた。目撃者および人民日報の報道(八日付)を総合して、事件を再現すると――

▽五日早朝、記念碑の花輪や遺影が撤去されたことに不満を抱いた群衆は、民兵など警備員を詰

問し、彼らを毆打し、追いかけて、広場西方の人民大会堂の東門と南門に約一万人が押しかけた。群衆はインタナショナルを高唱し、その中の代表らしい者数十人が当局と交渉のためか、大会堂の中に入っていた。この間、反右派闘争の拠点である清華大学の学生が拉致され、記念碑の前で、周前首相の遺影に土下座させられた。

▽同一一時過ぎ、群衆の一部は広場東南の解放軍宿舎を占拠、一二時前「首都人民総理追悼委員会」の成立を宣言、一〇分以内に要求を入れなると、公安部門を破壊すると宣言、午後零時四十分ごろ、警官隊がかけつけたが、凶器などを突きつけられて阻止された。

▽同午後、暴動は大きくなり、公安局の自動車四台が焼き打ちされ、同五時ごろ、解放軍宿舎は略奪、焼き打ちされた。

▽同六時半、呉徳北京市革命委员会主任(党政治

局委員)は「この騒乱は悪人が扇動した反革命行為であり、革命大衆は即刻退去せよ」との布告を広場周辺の拡声器で繰り返して放送、同九時半、数万人の首都労働者民兵がなおも残っている群衆を実力排除し、扇動分子を逮捕した。今回の騒乱について、当局は清明節を利用した反革命分子の計画的、組織的な擾乱であると述べている。それにしても、周恩来氏死してなお大衆の間における人気がどれほど根強いものであるか、一月の服喪と合わせ、まざまざと浮き彫りにしたものだ。

### 故周首相を敬慕する詩

清明節の献花は政府各機関職員、工場労働者、学生、児童、市民の間から自然と盛り上がってきたものだ。人々は記念碑の前に黙禱を捧げ、会場を埋め尽くした花輪には文字の国らしく、無数の詩が散りばめられた。

「周総理、あなたは墓も碑もありませんが、あなたは私たちの胸の中に、とこしえに生き続けるでありますよ」「周おじさんを追悼します――あなたの子供たちより」「あなたの遺志を継いで祖国建設の大道に邁進します」――等々、敬慕の念

# 世界週報

4月27日号 1976

大正9年10月9日 第3種郵便物認可  
昭和29年2月19日国鉄東局特別扱承認雑誌  
第2736号 第57巻 第17号 通巻第2738号  
昭和51年4月27日発行 (毎週火曜日発行)

時事通信社

**特集 激動する中国**—天安門事件と鄧小平再失脚 中嶋嶺雄 北京、香港各特派員  
**デタントは挫折したか**—冷却化する米ソ関係 ワシントン、モスクワ各特派員  
**"時限爆弾"抱えたタイ・セニ内閣**—総選挙で民主党が圧勝 バンコク特派員

ガンジー・インド首相



**ガンジー** 独裁し経済再建  
 —非暴力論のインド  
 国際協力事業団総裁 法眼著作  
 国際協力事業団総裁 法眼著作

国際人